

鎮源『法華驗記』の持経者像

常不輕菩薩と基燈法師

岡 田 文 弘

一 はじめに

鎮源（生没年未詳）撰の法華説話集『本朝法華驗記』（長久年間（一〇四〇—一〇四四）成立、以下『驗記』）には多くの持経者の伝記が収められている。こうした伝記は先学において、当時の修行者の有り様とそれへの信仰を反映させたものとして扱われてきた⁽¹⁾。しかしその筆致は単なる忠実な記録ではなく、説話文学として当然のことながら、神話的叙述をはらむものであり、十分な検討を必要とする。本論文では、鎮源がいかに持経者を描いたか、その神話的叙述法に着目し、『驗記』における持経者像がどのように構築されていたのかについて考察を試みたい。

具体的には、第六九話「基燈法師」（『日思』五四二頁上）を取り上げる。結論を先に言えば、筆者は同話が『法華經』常不輕菩薩品第二十（以下、不輕品）を下敷きになっている、と推定している⁽²⁾。本研究ではこの仮説を提示・検討しつつ、鎮

源がいかに『法華經』の菩薩信仰を消化しつつ持経者説話を生み出していったのか、その手法とスタンスの一例を考究する。

なおここで補足として、説話文学における常不輕菩薩の扱いについて述べておく。常不輕菩薩に関連する説話は少ない⁽³⁾。先学においては、広田哲通氏が不輕品説話として七例を指摘している⁽⁴⁾。なお広田氏は第六九話を不輕説話として扱っていない。

二 第六九話「基燈法師」と不輕品との関連性

本節では第六九話「基燈法師」（『日思』五四二頁上）と不輕品との類似性を指摘する。

第六九話は表題の示す通り、基燈法師という法華持経者の伝記である⁽⁵⁾。文中、基燈の独自性として述べられているのは、①長寿、②六根清浄、③非情・有情を問わず恭敬し仏を見る、の三点が主に挙げられる。

まず①長寿、②六根清浄の二点について確認してみる。該当箇所は以下の通り。

寿命極長。百四十余歳而腰不曲。起居輕利、面貌少壯、如三十人。眼見遠境色像、耳聞數里外声也。世間人稱六根淨聖。

このように基燈の常識を超えた「長寿」についての挿話は、神話的性格が強調された叙述になっており、本話の特色の一つと言えよう。また六根清浄に關しても、その人物の重要な特質として殊更に強調されているのは基燈のみである。⁽⁶⁾

このように基燈の目立った特徴となっている長寿と六根清浄であるが、これらはいずれも、不輕菩薩の特性と一致するものである。

不輕品においては、不輕菩薩が威音王仏の説いた『法華經』を受持することで六根清浄を得、また寿命を延ばしたことをその果報として説いている。

具聞威音王仏先所說法華經。二十千萬億偈悉能受持。即得如上眼根清浄耳鼻舌身意根清浄。得是六根清浄已。更增壽命二百萬億那由他歲。(大正九、五一上六一七)

このように、長寿と六根清浄の二種は、不輕菩薩の法華持經者としての属性中、その主たる要素である。⁽⁷⁾

以上まとめると、基燈と不輕菩薩はいずれも、「長寿と六根清浄を属性とする」点をその特色とする、という点で一致している。

鎮源『法華驗記』の持經者像(岡田)

次に、③有情・非情を問わず恭敬し仏を見る、という箇所を見てみたい。

於非情草木猶生恭敬心、況有情類作眞仏想

このモチーフと關連が想定され得るのは、不輕菩薩による但行礼拝の挿話である。諸存在への平等な恭敬心と、但行礼拝とを直ちに結びつけることの妥当性に關してはいまだ考察の余地があるが、ここで参考として『閑居友』卷上・九について見ておきたい。同話では、「すべてこの不輕といふ事の心は、衆生の胸の底に仏性のおはしますを、敬ひ拝み奉る也」と意義付け、その根拠を「こまかには涅槃經にみえたり」と『大般涅槃經』所説の仏性論に求め、「蟻・螻蛄」「あやしの鳥、けだ物」までが敬うべき存在である、としている(『新日本古典文学大系40 宝物集 閑居友 比良山古人靈託』三八〇―三八一頁)。このように『閑居友』は、仏性説の観点から、畜生への礼拝をも但行礼拝行として明示している。

更に『閑居友』はその後に、『驗記』第七四話「播州雪彦山玄常聖」における、畜生礼拝のモチーフ(見鳥獸屈腰)に言及し、これを但行礼拝の一例としている。⁽⁸⁾ここで第七四話と第六九話を比すれば、後者は、その恭敬の対象範圍が草木等の非情にまで拡大されていることが着目される。この教理的根拠としては、「一草一木一礫一塵各一仏性各一因果具足緣了」(湛然『金剛錍』大正四六、七八四中二―二二)等に

明らかな、中国天台由来の草木成仏説が推定されよう。

以上まとめておく。基燈法師は、不軽品における不軽菩薩と共通項を有している（長寿、六根清浄、諸存在への恭敬／仏性の観察）。ここから、鎮源は不軽菩薩を素材として、基燈法師という「持経者の理想像」を構築した、と推定出来よう。⁽⁹⁾

また説話末尾において、「常見善夢想、如四安樂行夢唱八相」と、安樂行品第十四に説かれる四安樂行への言及があることも注目すべきである。『驗記』中、四安樂行への言及があるのは本話のみとなる。なぜ本話において殊更にこのような言及があるのかについては、智顗『法華文句』における、不軽菩薩の行を四安樂行に配当する解釈を踏まえた可能性を指摘しておきたい。

深敬是意業。不軽之説是口業。故往礼拝是身業。此三与慈悲俱。即誓願安樂行也。〔法華文句〕大正三四、一四一上二六一一七

このように本話における四安樂行への言及は、先述した「於非情草木猶生恭敬心、況有情類作真仏想」の一文（但行礼拝を、草木成仏説へと拡大したと思しき記述）と同様、不軽品を新たな説話として語り直す試みの中で、叡山僧たる鎮源が天台教理を用いた故のものである、と解せよう。⁽¹⁰⁾

三 結論

本研究では、鎮源がどのように持経者伝を作り上げていっ

たのか（『驗記』における持経者像はどのように構築されていたのか）、その一端を考察すべく、第六九話「基燈法師」を一例として取り上げた。

その結果、同話は『法華経』不軽品に説かれる不軽菩薩のモチーフ（長寿、六根清浄、但行礼拝）を素材とし、時に天台教理の成果を盛り込みつつ（但行礼拝と草木成仏説との関連づけ、四安樂行への言及）、これを再説話化することで成立した持経者伝である、と解釈しうると示した。

この第六九話の例からは、持経者伝は「行」の世界、仏教の実践面を示す史料であるが、その成立の上では、経典や教説といった「教」の面も深く関わっているという可能性が示唆される。一般に「行」と「教」は二項対立に置かれがちである。しかしそのどちらかに特化、ないしどちらかを排斥することなく、「教」を踏まえつつ「行」の説話を構築するという試みが、第六九話に見える、鎮源による「持経者伝」創出のスタンスであった、と言えよう。

無論、これはまだ一つの事例に留まり、この他にも『驗記』には多くの持経者伝があるので、今後も考究を続けたい。

1 橋川正『日本仏教文化史の研究』（丙午出版社、一九二四）、家永三郎「日蓮の宗教の成立に関する思想的探究」（『中世仏教思想史研究』法蔵館、一九四七）、井上光貞『日本思想大

系7 往生伝 法華驗記』校注(岩波書店、一九七四)、川添昭二「法華驗記とその周辺——持経者から日蓮へ——」(『仏教史学』八巻三号、一九六〇)、その他。

2 鎮源は説話に『法華経』の教理や経文を織り込む手法を得意とする。拙論「鎮源『法華驗記』における異類功德譚——並行話比較を中心に——」(『印度学仏教学研究』六二巻一号、二〇一三)等参照。

3 二十八品それぞれに説話を配当し類別した了円『法華靈驗伝』においても、不軽説話に相当するものは見られない(『大日本統蔵経』第一輯第二編乙第七套第四冊、蔵経書院、三九九丁裏—四〇〇丁表)。

4 「法華経常不軽菩薩品第二十が生む説話——閑居友上第九話を基点として——」(『説話文学研究』一八、一九八三)。なお広田氏は七例の他、更に『今昔物語集』(以下、『今昔』)巻十九・二十八(広田氏は二六とするが恐らく誤記)における不軽行の記述を指摘するが、同話は(氏の設定した)不軽説話の類型から外れるとする。

5 『驗記』以降の基燈の伝記は『今昔』巻十三—二十五、『元亨釈書』巻十一、『本朝高僧伝』巻六十八に採録(『日思』頭注、および『国訳一切経和漢撰述部 史伝部十九』改訂二版、大東出版社、一九八七、二二七頁脚注を参照)。

6 六根清浄を得た行者への言及は他に二例(第二六話・第七一話)あるが、どちらも偉大な行者を形容する際の装飾的文言として、他の文言(三業の調伏など)とあわせてテンプレート的に用いられているに留まる。

7 そもそも、不軽品(ならびに不軽菩薩)は、前章である法師功德品に示されるところの六根清浄のモデル・ケースを示す

ために説かれたと經典中に明示されている(如前所説。其所得功德。如向所説。眼耳鼻舌身意清浄」大正九、五〇中二六一二八)。このように、六根清浄位の象徴として、『法華経』では不軽菩薩が、『法華驗記』では基燈が説かれていることが分かる。

8 広田前掲論文はこれを踏まえ、畜生礼拝のモチーフを但行礼拝と見做している。

9 付言すると、第六九話の①↓②↓③というモチーフの羅列は、不軽品の対応モチーフを丁度逆転させたものである(不軽品では、但行礼拝↓六根清浄↓延命の順で語られる)。

10 なお、本話を継承した『今昔』巻十三—二十五には、四安樂行への言及はない(『新日本古典文学大系35 今昔物語集 三』岩波書店、一九九三、二二四頁脚注1も指摘)。「今昔」が『驗記』を引用する際には、その本文に織り込まれた『法華経』教理を削除する傾向にある(前掲拙論参照)が、これもその一例と言える。同様に『元亨釈書』『本朝高僧伝』の基燈伝にも、四安樂行への言及は無い。

※テキストは、『日本思想大系7 往生伝 法華驗記』(岩波書店、一九七四、『日思』と略)、『新日本古典文学大系40 宝物集 閑居友比良山古人靈託』(岩波書店、一九九三)、『大正新脩大蔵経』(「大正」と略)に依った。

〈キーワード〉『法華驗記』、常不軽菩薩、天台、持経者
(東京大学大学院)